

連載: 魂の中小企業

(魂の中小企業)親愛なるマザー・テレサさま(前編)

2015年8月4日22時00分



原爆ドームを背景に、ピンクの服をまとった多田多延子さん。いえいえ、ピンクへのこだわりは、こんなものではありません



親愛なる マザー・テレサ さま。

あなたは1984年11月、広島市を訪問されました。原爆資料館を見学されたり、原爆慰霊碑に花束をささげたりされました。広島に落ちた原爆を、「恐ろしい罪悪」と表現し、「二度とおこらないように、たがいに愛しあいましょう」という内容の言葉を残されました。

あなたは1910年8月26日に生まれ、翌27日に、洗礼を受けたそうですね。あなたのキリスト教徒としての誕生日、8月27日が誕生日という女性経営者が広島市にいます。生まれたのは、あの恐ろしい罪悪の日から23年の月日がたっていました。

多田多延子(たえこ)さん、46歳。土地改良、太陽光など、さまざまな環境事業を手がけている「ティーエスピー(TSP)」という会社の社長さんです。

写真を見て、あなたは、きっと驚かれたでしょう。あれもピンク、これもピンク、それもピンク。彼女が身につけているものすべてが、ピンクなのですから。

そうそう、白地にピンクの彼女の名刺には、「マザー・テレサと誕生日が同じ」と書かれています。

あなたは「平和はほほ笑みから始まる」とおっしゃいましたね。ほほ笑みいっぱいの方多田さんも、同じ思いでいます。「広島から平和と希望を発信したい」のだから、だからこそそのピンクづくめ

なのだそうです。

多田さんは、あっけらかんとしています。「よく聞かれるんですが、もちろん下着もピンクです、お見せできませんが、ハハハ」

それにしても、ピンクという色を見ていると、こっちも元気になってきませんか。

では、被爆2世でもある多田さんの物語を、あの青い夏空の上でお聞きください。

まずは、多田さんの生まれる前に起こった、あの恐ろしい罪悪からはじめなくてはなりません。



1945年8月6日、月曜日。広島は朝から快晴で、気温はうなぎのぼりだった。午前7時すぎに警戒警報が出されたものの、まもなく解除された。

そして、午前8時15分。広島に 原子爆弾 が落とされた。

多田の母方の家は、家畜の飼料などをつくる会社をいとなんでいた。爆心地 ちかくにあった。

多田の母の祖母、つまり、多田にとっての曾祖母は、夫と死別し、ひとりで会社を切り盛りしていた。何人もの外国人を従業員として雇っていた。

原爆が落とされたけれど、曾祖母は無事だった。爆発のとき、たまたま庭に出ていたので家の陰に入り、爆風の直撃をまぬがれたのだ。そのとき曾祖母、56歳。

だが、多田の母の母、つまり多田にとっての祖母、曾祖母にとって娘は、家の中にいた。屋根が落ちて即死した。そのとき祖母、23歳。彼女の夫、つまり多田にとっての祖父は、フィリピンで戦死していた。

つまり、多田の母は、戦争と原爆で両親を失ったのである。

多田の母は弟と、近所の家に遊びに行っていた。家は倒壊したが、ふたりとも無事だった。そのとき母、5歳。

曾祖母は母たちを連れて逃げた。火を避けて、そして、真っ黒な雲から降る雨にぬれたらダメ、と直感して。この雨は、いわゆる 黒い雨、ブラックレインである。

そして、8月15日、敗戦。焼け落ちた工場、機材などすべてを、元外国人従業員たちに奪われてしまった。

広島市 内には、むごい光景が広がっていた。曾祖母は、放心状態だった。そんなとき、おとなの女性たちが、おなかをすかせた子どもたちが、小麦粉を焼いてつくったものを食べさせている光景にであった。そこは、笑い声につつまれていた。

曾祖母は、こう思ったらしい。

〈いっしょうけんめいに生きていく、それが遺(のこ)された者たち、救われた命のつとめだ〉

〈うつむいて泣いている場合じゃない。恨んだり憎んだりしている暇なんか、ない〉

曾祖母は、残っていた銀行預金をもとに、会社を再建していった。やがて、曾祖母の孫、つまり多田の母は、薬剤師 である父と結婚、父といっしょに薬局チェーンをいとなんだ。



親愛なる マザー・テレサ さま。

そして、多田さんが生まれました。多田さんが5歳のとき、曾祖母さんは亡くなります。きれいで、いつもピシッとしていて、多田さんにとって、あこがれの人でした。だから多田さんは、なんと3歳のときに、「わたしも会社の経営者になりたい」と言いはじめたそうです。



両親を早くに失ったからだろう、多田の母は、多田に両手では足りない愛情を注いだ。美術館をめぐり、クラシックのコンサートやオペラ、歌舞伎に連れて行った。

3歳で 英会話 を学ばせた。娘が中学1年になったらアメリカにいかせる、と決めていたから。アメリカに行くのなら、日本のことも学ばせなければと、ありったけの「道」を学ばせた。茶道、華道、書道、合気道、香道。お琴もさせた。

幼稚園は、私立に入らせた。そこには、広島の「お金持ち」の子どもたちが通っていた。小学校は公立に行かせた。裕福な人たちばかりとつきあっていたら娘はダメになる、と考えたらしい。

多田は、子ども心に、格差を見てショックを受けた。同級生の中には、バラックに住んでいる子がいた、お手伝いさんを10人も抱えるいる子もいた。多田は、クラスメートみんなと、分け隔てなく仲良くした。ただし、いじめっ子は許さなかった。

多田は、ピンクレディーが好きだった。

♪私ピンクのサウスポー 私ピンクのサウスポー

思えば、子どものときからピンクが好きだった。

小学5年生、10歳のとき、友だちに誘われて、とある 芸能事務所 のオーディションを受ける。合格した。

明日は地元のテレビ局に行く、そんな日だった。多田は、面白いと評判だった展示会に行こうと思った。もうすぐ閉館の夕方5時になってしまう。顔を下に向けて自転車を目いっぱいこいだ。

急いだ、急いだ、急いだ。次の瞬間である。ガッチャーン。



親愛なる マザー・テレサ さま。

自転車と自転車の正面衝突だったそうです。多田さんのからだは吹っ飛びました。ラッキーだったのは、現場に、たくさん人がいたことです。そして、おおくの人が、「多田さんちのお嬢さんだ」と知っていたことでした。救急車を呼べ、多田さんちに電話しろ！

多田さんは病院に運び込まれました。頭蓋骨 (ずがいこつ) 陥没、頭をあけての緊急手術が行われることになりました。



かけつけた母に、医師は告げた。

「生存確率は数パーセントです。手術がうまくいっても、半身不随で寝たきりになると思います」

母は気絶した。じつは、多田には兄がいた、いや、いるはずだった。ところが、死産だった。母は、死んで生まれた子を一目みたかった。でも、見せてくれない。

〈わたしは被爆している。もしかしたら、その影響で死んだんだらうか。死産だった息子のからだに、異常があったのかしら〉

多田の母は、ずーっとそんな想像をしてきた。だから、元気に生まれてきた多田に、ありったけの愛情をそそいできた。

なのに、なかば死の宣告である。気絶するのも無理はない。

手術は成功した。多田の目がさめた。ここはどこ？ 病院だとわかった。緊急の患者さんたちが入る病棟だった。

毎日、毎日、だれかが、悲鳴をあげて死んでいった。

多田は、白い天井に話しかけた、心の中でだけれど。

〈ねえ、わたしも死ぬの?〉

翌朝、しっかり目覚める。夜、あした死ぬんだろうか、と自問する。そんな日々をすごすうちに、多田はこう思うようになった。

〈わたし、生かされているんだ〉

朝めざめることが、感動に変わった。

〈しあわせだー〉

がぜん食欲がわいてきた。病院食じゃたりないわ、とカツ丼などの出前を頼んだ。

そして、2週間で退院した。これには医師も驚いた。

不思議なことがおこった。それまで成績はクラスの真ん中ぐらいだった。ところが、いきなり成績がよくなった。中学受験をして、名門の広島女学院に合格した。



親愛なる マザー・テレサ さま。

多田さんはいま、毎朝、目覚めたら思うのだそうです。〈わたし、生かされているんだ、しあわせだー〉。一度死んだ身です。ダメされようが、人に裏切られようが、うらまないことにしたそうです。原爆を落とされた広島の人たちが、複雑な思いを克服してうらまない、のと似た心境かもしれません。



母の願いどおり、多田は中学1年の夏休みに、アメリカに行った。母の知人に世話になった。その家で、パーティーが開かれる。さまざまな業種の経営者がきた。会社をつくるぞ、とあらためて思った。

ところが、パーティーの席では、首をかしげつづけることの連続だった。

はじめて会う人と話をすると、向こうは必ずこう聞く。

「多延子は、日本のどこから来たの？」

多田は、広島です、と答える。

すると、みんな、悲しい表情をした。黙ってしまう人がいた。たいへんだったねと、言ってくれる人がいた。

そのたびに、多田は明るく答えた。

「広島の人みんな、前を向いて生きています」

多田が中学と高校をすごした学校の生徒たちは、広島を案内するボランティアをしていた。広島に来る外国人たち、修学旅行の人たちがくると、授業を抜けて、平和公園などを案内するのだ。

多田は喜んでボランティアに参加した。だが、案内を重ねるうちに、つらくなってきた。

原爆で何人が亡くなったのかなど、被害の説明ばかりをしなくてはならなかったから。市内にあるいろいろな記念碑の説明をするのだけれど、悲しみに満ちた話しかできなかったから。

ボランティアをすればするほど、多田の心は乱れる。

〈わたしが生まれ育った広島は、みんな前を向いている。娘を助けられなかった曾祖母も、前を向いていた。両親を亡くした母も、前を向いている〉

〈みんな、うらみ、つらみなど言っていない。なのに、そんな前向きな姿を、わたしは伝えられていないわ〉



親愛なる マザー・テレサ さま。

多田さんの半生には、お話したいことがたくさんあります。なので、ここで前編終了、とさせていただきます。ここから、ばつぐんの行動力を発揮し、挫折も経験し、そして、ピンク社長と呼ばれるようになります。

この原稿が朝日新聞デジタルにアップされるのは、8月4日の夜です。6日は広島で、9日は長崎で、70回目の原爆 慰霊の日 を迎えます。そして、15日は、70回目の 敗戦の日。それらを見届けて、18日の夜、このつづきをお話させていただきたいと思います。(つづく、一部敬称略)



中島隆(なかじま・たかし) 朝日新聞の中小企業担当編集委員。福岡生まれの千葉育ち。自称、中小企業の応援団長。著書に「魂の中小企業」(朝日新聞出版)、「女性社員にまかせたら、ヒット商品できちゃった」(あさ出版)。就活生向けの朝日学情ナビでコラム「輝く中小企業を探して」を連載中。朝日新聞朝刊で月1回特集している「われら中小企業」のまとめ役。

連載: 魂の中小企業

(魂の中小企業) 親愛なるマザー・テレサさま(後編)

2015年8月18日22時00分

シェア
3

ツイート
6

ブックマーク
0

スクラップ

メール

印刷

お気に入り連載



もちろんピンクの多田多延子さん、広島平和記念公園にて



親愛なる マザー・テレサ さま。

あの夏の青空の上にいらっしゃるあなたに、
2週間ぶりにお手紙をしたためます。

あなたの キリスト教徒としての誕生日、8月
27日に生まれ、あなたも訪問されたことがあ
る 広島市 の多田多延子(たえこ)さん(46)の
物語の続きを、お伝えしたいのです。

服、バッグ、その中身、スーツケース、
ゼー—んぶピンクの、あの女性社長のお話の
後編です。

まずは、前編のおさらいをさせていただきます。



被爆2世 の多田は、母方の祖母を原爆で
失った。祖父は戦死。つまり多田の母は、両親
を戦争で失っていた。母にとっての祖母、つまり多田にとっては曾祖母が、母を育てた。

曾祖母は気丈な人だった。

〈いっしょうけんめいに生きるのが、遺(のこ)された者のつとめだ。うつむいている場合じゃな
い。恨んだり憎んだりしている暇なんか、ない〉

曾祖母は、いとなんでいた会社を再建した。そんな曾祖母に、多田はあこがれた。

多田の母は 薬剤師 である父と結婚、いっしょに薬局チェーンをいとなんだ。

だから、多田は幼いころから決めていた。

〈おおきくなったら、わたしも会社をするの〉

母は、多田を、それは大切に育てた。実は、多田には兄がいるはずだった。だが、死産。母は被爆した影響だったのでは、と自問してきた。だから、元気に生まれてきた多田に、ありったけの愛情をそそいだのである。

ところが、多田は小学5年のとき事故にあう。頭蓋骨 (ずがいこつ) 陥没。医師は「生存率数%、手術がうまくいっても半身不随で寝たきりになると思います」という。それを聞いた母は、気絶。

手術はうまくいった。名医だったのだろう、医師は、いいほうに診断を外した。2週間で退院した。

それからというものの、多田は毎朝、目覚めると思ってきた。

〈わたし、生かされているんだ。感動だー、しあわせだー〉

中学1年の夏休みには、アメリカの知人宅で過ごす。その家で開かれたパーティーで会う人たちは、必ず多田に聞いた。

「日本のどこから来たの？」

「広島です」

みんな悲しい表情をした。黙ってしまう人もいた。

多田は明るく答えた。

「広島の人みんな、前を向いています」

高校時代には、ボランティアをした。広島に来る外国人や修学旅行の人たちを 平和公園 などに案内する役だった。

原爆の被害などを説明する日々。多田はつらくなってきた。

〈広島の人たちは、みんな前を向いている。うらみ、つらみなど言っていない。なのに、そんな前向きな姿を、わたしは伝えられていないわ〉



親愛なる マザー・テレサ さま。

多田さんがピンク色でいる理由をお話しするまえに、ふたつのことを確認しておかなくてはなりません。

ひとつは、多田さんは子どものころ死にかけた、ということです。だから、毎朝、目覚めると、生きていることに感謝、感動している、ということです。

もうひとつは、ボランティアをする日々を送るうちに、もどかしさで心がいっぱいになった、ということです。〈広島の人たちが前を向いている姿を、わたしは伝えられていないわ〉

さて、多田さんがなぜピンク色なのか。その理由をお話しする前に、彼女の行動力、そして会社をつくってからのことを少しお話します。おつきあいください。



多田は短大にすすんだ。あと2年間だけ学生をして起業よ、と考えたのだ。入学してまもなく、国鉄の民営化にともなってできた JR西日本 の初代「ミスJR広島」に選ばれた。みずから応募したのではない。友だちが多田の写真をとり、「送っとくからねー」と言われた。

たすきをかけて、いろいろな場所に行った。すると、うちのイベントの司会をしてくれないか、などと頼まれるようになる。

〈ビジネスのタネ、みつけた〉

多田は、モデルとアナウンサーの間のような女性を養成して、派遣する事業をたちあげた。貯金をおろし、個人事業主としての船出だ。かかえる女性スタッフは全国で800人にもなった。宝石チェーン、通信会社 などのイベントに派遣していった。

短大を卒業してからの1年間は、ラジオパーソナリティーもした。コンサート会場に行ってアーティストにインタビューする、という内容。取材も編集も、ほぼぜんぶ自分でした。

そして、1996年。28歳で、いま経営している会社「TSP」をつくった。イベントやテーマパークのプロデュース、さらにはマンションの間取りを映像で再現するCGソフトの開発と販売、さらにさらに、結婚相談所 ……。いろいろとやった。

そして、いま力をいれている 太陽光発電 に関連するビジネスにいきついた。太陽光パネルを土地つきで販売し、太陽光発電 による売電で稼いでもらう、という仕組みのビジネスだ。

大失敗した事業もある。でも、へこたれなかった。

〈いちど死んだ身、生かされている身。へこたれてなんか、いられないわ〉

スタッフに裏切られたこともあった。でも、割り切った。

〈うらんでも仕方ない、人を信じつつけるわ〉

会社が順調にまわりはじめるのに10年ほどかかった。

ちなみになぜ社名が「TSP」なのかというと……。 「タエコ・スペシャル・プロジェクト」の頭文字である。たくさんの人に役立つ特別な事業をしていきたい、という思いをこめる。



親愛なる マザー・テレサ さま。

なぜ、多田さんが、ゼー—んぶピンクなのか、お話をさせていただきます。

会社がうまく回りはじめた多田さんは、2009年5月、「peace piece project」(ピースピースプロジェクト)という市民団体を立ち上げました。

広島は、世界初の被爆都市です。でも、世界一の復興都市です。イベントなどの活動を通じ、平和と希望をひとつ、ひとつ大切に全世界に発信していきたい、という壮大な思いがあります。

多田さんの初めての仕事は、世界一おおきな折り鶴をつくる、と記者会見にのぞんだことでした。

テレサさまもご存じのように、広島の 平和記念公園 には、たくさんの千羽鶴が寄せられています。世界中の人たちが平和を祈って鶴を折り、送ってきます。多田さんたちは、世界中の平和への思いをひとつにした超ビッグサイズな折り鶴をつくる、という計画を打ち上げたのでした。

その記者会見にのぞんだとき、多田さんの服の色が……。 ご察しのお通り、ピンクだったので。



その記者会見をきっかけに、多田はピンクについて調べた。そして、こんな思考回路で、「すべてピンク」にたどりつく。

〈おかあさんの子宮の中は、ピンク。赤ちゃんは、それを記憶しているらしいわ〉

〈だから人間は、ピンクを見ると、しあわせホルモンを分泌するらしいわ〉

〈だとしたら、わたしがピンクを着ていたら、会う人にしあわせホルモンを分泌させてあげることができるんじゃないかな?〉

〈きょう会った人に、しあわせになってほしい。でも、あした会う人には、しあわせになってほしくないの?〉

〈ちがうわ。すべての人にしあわせになってもらいたい。どうしようかしら……〉

〈そうだ、着るもの、持ち物を、いつも、ゼー—んぶピンクにしまおう〉

服、財布、携帯ケース、スーツケース、着物、ハイヒール、口紅。ゼー—んぶピンクにした。爪の色もピンクに。会社の事務所にかざるバラも牡丹(ぼたん)もピンク。

ピンク以外の服は、たいせつに保管しつつ、人にあげている。ピンク以外の服を着るのは、お葬式に参列するときぐらいだとか。

そういえば、と多田は思った。

英語に、「in the pink」(イン・ザ・ピンク)という熟語がある。しあわせに満ちている、絶好調だ、という意味だ。

外国人の友人に、多田は言われたことがあった。

「たえこ、君は、in the pinkだね」

あるとき、外国から来たお客さんに、広島を案内したことがあった。早朝、朝日に映えてピンク色に染まる 原爆ドーム をみて、その人は言った。「広島は、in the pinkだ」

そのとおり、広島は美しく、力強く、明るく、希望に満ちているのである。



親愛なる マザー・テレサ さま。

多田さんがピンクに走ったのは、あなたに影響されたから、でもあるんです。

10歳で事故にあい、死にかかった多田さんは、生かされていることに感謝するようになりました。そして、小学校の図書館で偉人たちの本を読みつくしました、漫画だったそうですけれど。

そのとき、誕生日が同じだったあなたに巡り合ったのです。

あなたの言葉の数々に、多田さんの心が打たれます。

たとえば、これです。

「世界平和のためにできることですか？ 家に帰って家族を愛してあげてください」

こんなこともおっしゃってますね。

「導いてくれる人を待っていてはいけません。あなたが人々を導いていくのです」

「暗いと不平を言うよりも、あなたが進んで明かりをつけなさい」

「神さまは私たちに、成功してほしいなんて思っていません。ただ、挑戦することを望んでいるだけ」

「私たちは、大きいことはできません。小さなことを大きな愛をもって行うだけです」

そして極めつきは、これです。

「あなたに出会った人が最高の気分になれるように、親切と慈しみをこめて人に接しなさい」

「ピンクの多田さん」は、あなたの言葉の、彼女流の実践でもあるのです。

さて、多田さんたちは2009年8月、のべ800人の力をあわせて、幅81・9メートル、高さ36メートル、重さ1トンの折り鶴をつくりました。ギネスの記録になっています。

そして、原爆投下 から現在までを、多田さんの家族の実話などをもとにした漫画全5巻を完成させました。

原爆のむごさも描かれています。ですが、うらまず、憎まず、前を向いて奇跡の復興を成し遂げた人たちの、やさしさと強さ、そして平和の大切さを、女性の視点で、やわらかく訴えています。

ちょっと長いのですが、タイトルを記します。

「キセキのヒロシマ 朝陽(ひ)に映えて HIROSIMA is in The PINK！」

多田さんたちは、寄贈活動をすすめています。広島市内の図書館、平和資料館、広島市内の小中高、さらに広島に平和学習にくる学校にです。また、40カ国以上に向けて翻訳、世界発信しようと計画を練っています。



親愛なる マザー・テレサ さま。

多田さんは、ピンクの名刺に「マザー・テレサ と誕生日が同じ」と記しています。

その理由を、聞いてみました。多田さんは答えました。

「同じ誕生日だということを忘れずに、マザー・テレサ のような勇気をもちつづけなくては、と自戒するためです」

この8月6日は、70回目の 原爆の日 でした。朝8時15分、東京にいた多田さんは、西の空に向かって静かに祈りました。漫画「キセキのヒロシマ」の 世界発信 の打ち合わせに来ていたのです。

すこし長くなりますが、漫画の最後に書かれている多田さんたちの思いを記します。

「原爆投下 から70年の歳月が流れ、ヒロシマは近代的で美しい街としてよみがえった。そして、そこに住む明るい人々。今や、ヒロシマに原爆の面影を探すのは困難となりました。ヒロシマは原爆に打ち勝ったのです」

「でも、もっと美しく栄え続けて欲しい。世界中が溜(た)め息をつくほど、平和であって欲しい。ヒロシマに挑戦し続けて欲しい」

「人類が完全に核の脅威から開放されるその日まで」

親愛なる マザー・テレサ さま。

どうか、あの青い空の上から、わたしたち人類を見守っててください。そして、1日もはやく、核のない平和な世界になることをお祈りください。

心から(一部敬称略)



中島隆(なかじま・たかし) 朝日新聞の中小企業担当編集委員。福岡生まれの千葉育ち。自称、中小企業の応援団長。著書に「魂の中小企業」(朝日新聞出版)、「女性社員にまかせたら、ヒット商品できちゃった」(あさ出版)。就活生向けの朝日学情ナビでコラム「輝く中小企業を探して」を連載中。朝日新聞朝刊で月1回特集している「われら中小企業」のまとめ役。